

たちばなかんが 橘樹官衙遺跡群について

川崎市教育委員会 栗田 一生

I. はじめに

古代武蔵国にあった21郡の1つである橘樹郡は、現在の川崎市域の大部分と横浜市の一部にあたります。史跡橘樹官衙遺跡群は、古代橘樹郡の役所跡が所在するちとせいせやまだい千年伊勢山台遺跡〔橘樹郡家跡〕とその西側に隣接する古代寺院跡が所在する影向寺遺跡から構成されており、「7世紀後半の地方行政組織である評の役所の成立や構造、そこから郡家へと発展する過程

やその後の廃絶に至るまでの経過をたどることができる稀有な例であり、わが国にとって重要な遺跡である」として、平成27（2015）年3月10日に川崎市初の国史跡に指定されました。この橘樹郡は、大宝元（701）年に施行された大宝律令で全国に設置された「国－郡－里（後に郷）」という地方行政組織の1つですので、橘樹郡の誕生と言えばこの701年ということになります。

ただ、この橘樹の地が歴史上に初めて登場するのは、『日本書紀』巻第十八の安閑天皇元年閏十二月の条の、「笠原直使主と同族の小杵が武蔵国造の地位を争い、朝廷の援助を受けて争いに勝利した笠原直使



図1 川崎市と史跡橘樹官衙遺跡群の位置



図2 武蔵国における川崎市域と橘樹官衙遺跡群

主が、そのお礼として「横^{よこぬ}淳^{ちゆ}屯倉」・「橘^{たちばな}花^{はな}屯倉」・「多^{おおひ(たひ)}氷^ひ屯倉」・「倉^{くらす(くらき)}櫨^{くらし}屯倉」を献上⁽¹⁾した」という記事です。この安閑天皇元年は西暦 534 年にあたるとされていますので、この年代が正しいとすれば、6 世紀前半にはすでに橘樹の地がヤマト王権との関係をもっていたことになります。

今回のミニシンポジウムでは、橘樹の始まりであり、橘樹官衙遺跡群が成立する上で大きな影響を与えたと考えられる橘花屯倉を取り上げ、屯倉研究の第一線で活躍されている先生方にそれぞれお話をいただきます。そのお話の前に、橘樹官衙遺跡群とはどういう遺跡なのか等を広く知っていただくため、その概要と 5 月 18 日オープン予定の橘樹歴史公園の紹介をしたいと思います。

Ⅱ．橘樹官衙遺跡群の概要

(1) 橘樹官衙遺跡群とは？

橘樹官衙遺跡群は、神奈川県川崎市のほぼ中央部に位置する高津区^{ちとせ}千年・北野川、宮前区野川本町 3 丁目に位置し、東は多摩川とその沖積低地を一望でき、西は富士山を仰ぎ見ることができる、標高 40 ～ 42 m の丘陵平坦面に立地しています。

橘樹官衙遺跡群を構成する千年伊勢山台遺跡〔橘樹郡家跡〕は、平成 8（1996）年に宅地造成に伴う発掘調査（千年伊勢山台北遺跡）で東西に整然と並ぶ倉庫群が確認され、初めてその存在が明らかになりました（河合ほか 2000）。その後、川崎市教育委員会が組織した（推定）橘樹郡衙^{ぐんが}発掘調査団による「橘樹郡衙推定地確認調査事業」が平成 10（1998）年度から平成 15（2003）年度に実施され（服部・河合ほか 2005）、平成 25（2013）年度からは川崎市教育委員会が橘樹官衙遺跡群確認調査事業を継続的に実施しています（服部・栗田 2014、栗田 2018・2022）。その結果、橘樹郡家の主要施設である正倉院の様相が概ね明らかになるとともに、同じ主要施設である館や厨家もその所在地がほぼ明らかになる等、その内容が徐々に明らかになってきました。ただ、郡の政務等を行う場であった郡庁はまだ発見されていません。

遺跡群を構成するもう 1 つの遺跡である影向寺遺跡は、古くから古瓦が散布していることが知られ、また現在も同じ場所で法灯を伝える影向寺の縁起に天平年間の創建と記されていること等から、かつては 8 世紀代の創建と推定されていました。しかし、昭和 52（1977）年度から昭和 55（1980）年度に実施した影向寺文化財総合調査における境内の発掘調査の成果から、古代寺院創建が 7 世紀後半の白鳳期まで遡ることが明らかになりました（伊東・竹石ほか 1982）。影向寺遺跡についても、それ以降、多くの発掘調査が実施され、確認されていた金堂・塔だけでなく、大型の掘立柱建物や寺院の倉庫と考えられる総柱建物や西側や南側を区画する施設等が発見され、古代寺院の様相が徐々に明らかになってきています（河合・伊東 2007、河合ほか 2007、服部・栗田 2014、栗田 2018）。

(1) 橘花屯倉以外の屯倉としては、「横淳屯倉」は横見郡、「多氷屯倉」は多磨郡、「倉櫨屯倉」は久良郡に比定する説が一般的である。

(2) これまでに明らかになった橘樹官衙遺跡群の様相

①東西に並ぶ郡家と寺院

1996（平成8）年度から現在までの発掘調査の結果、西から東へと伸びる丘陵平坦面を上手く利用しながら、郡家諸施設と寺院が東西約600mの範囲に並んで設置されたことが明らかになってきました。まだ郡庁は推定でしかありませんが、橘樹官衙遺跡群が最も整備された8世紀代には、西から古代寺院、館、厨家、（郡庁）、正倉院という順で配置されていたと考えられます。

この場所に郡家諸施設や寺院が設置された最大の理由は、古墳時代から各地域を結んだ道の合流地点であり、東京湾へとつながる河川も隣接する、水陸交通の要衝であったためと考えられます。現在の東京都区部からやって来た人々は、多摩川を渡る前から、遠く西の丘陵上に郡家正倉院に並ぶ倉庫群の巨大な屋根が見えたことでしょう。このように、古代橘樹郡の力を人々に知らしめるには、うってつけの場所であったといえます。

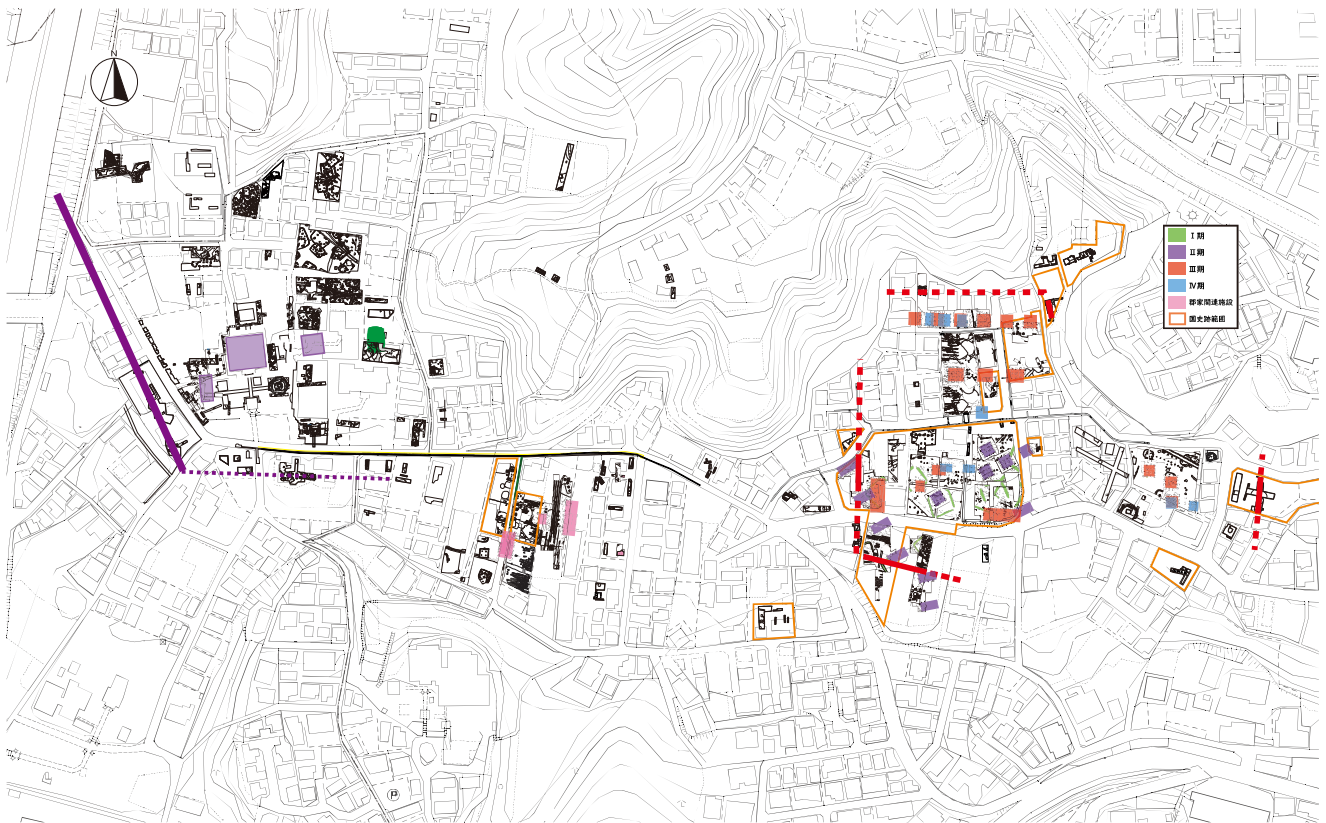


図3 8世紀代の橘樹官衙遺跡群関連施設推定図（S=1/2000）

②橘樹郡家正倉院の変遷と構造

橘樹郡家跡の正倉院は、発見した遺構の切合い（重なり）や建物主軸方位の違い等から、Ⅰ期（7世紀第3四半期頃）、Ⅱ期（7世紀第4四半期頃）、Ⅲ期（8世紀代）、Ⅳ期（9世紀前半）、Ⅴ期（9世紀後半～10世紀初頭）という5期の変遷があったと考えられています。そのうち、Ⅰ・Ⅱ期は橘樹評^{ひょう}の時期、Ⅲ～Ⅴ期が橘樹郡の時期で、特にⅢ・Ⅳ期は郡家正倉院が維持されていた時期といえます。

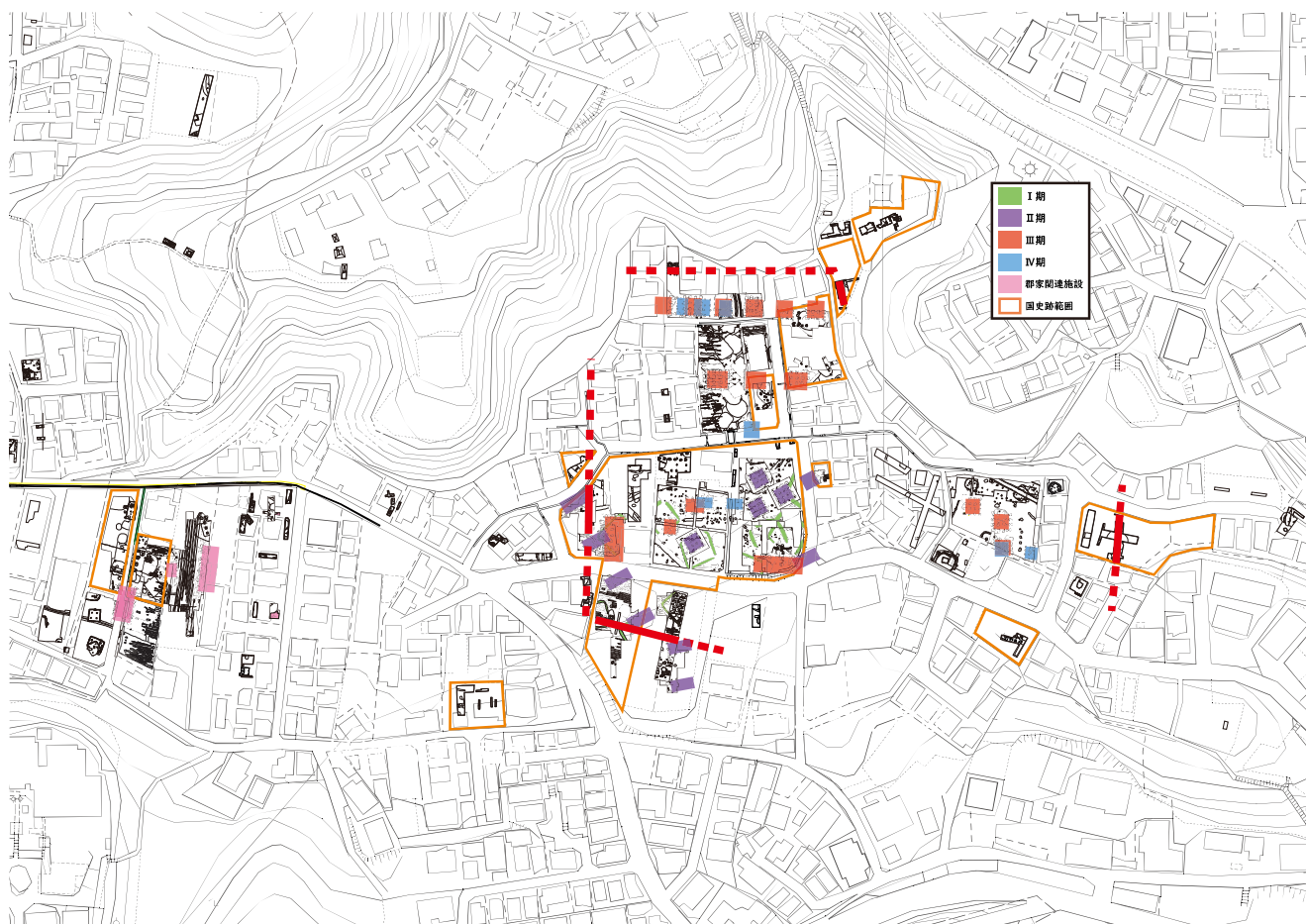


図4 橘樹郡家関連施設推定配置・変遷図 (S=1/1500)

I期は7世紀第3四半期頃と考えられ、四方ないし三方に溝が巡る遺構が多数発見されていますが、これらの遺構から柱穴などが発見されておらず、遺構の性格が不明であることから、現状は不明遺構と呼称しています。ただし、確認された遺構の特徴などから、北九州から近畿地方にかけて発見されることが多い、朝鮮半島に起源をもつ大壁建物おおかべに類似しているという指摘もあり、今後さらに検討が必要です。

II期は7世紀第4四半期頃と考えられ、I期と様相が一変し、溝が四方または三方に巡る遺構は見られなくなり、建物主軸方位が真北から30度ほど西に傾いた建物群が建てられます。これは、建物主軸方位が概ね北となるIII期の建物群とは大きく異なっていますが、III期の建物群と同様、建物が規則的に配置されていることから、官衙的性格が強い建物群であると想定されます。現状では、大宝律令で「橘樹郡」となる以前、7世紀後半の「橘樹評」と呼ばれた時期の建物群であると考えられます。

III期は8世紀前半～後半と考えられ、郡家正倉院が最も整備された時期です。これまでの調査で、東西南北を幅2～3mの溝で囲まれていたことが確認されています。II期の建物群は建物主軸方位が西に傾いていましたが、この時期はほぼ真北の主軸方位をとるようになります。そして、総柱の高床倉庫を含む多くの建物は、東西南北を溝で囲まれ（正倉院外周区画溝）、正倉院を形成していました。周囲の溝が全て連続していたかどうかは不明ですが、その規模は、外周区画溝の中心間が東西約213m、外周西側区画溝部分が南北約135mという広大な領域であったことがわかっていま

す。また、この規模が、この時代の長さの単位である唐尺（約 29.7cm）に換算すると概ね 710 尺と 450 尺と区切りのよい数値になることから、事前に施設の規模などの設計を行った上で、造営を行った可能性が高いと考えられます。

Ⅳ期は 9 世紀前半～中頃と考えられ、Ⅲ期に造営された正倉の一部が当初存続していた可能性もありますが、Ⅲ期のような大型の正倉等は造営されなくなり、正倉院が衰退し、終焉を迎える時期です。また、正倉院の外周区画溝もⅢ期の終わり頃までには中層まで埋没していた可能性が高く、Ⅳ期には溝が埋まり、失われていたものと推測されています。

Ⅴ期は 9 世紀後半～10 世紀初頭と考えられ、最終的に正倉院全ての機能を失い、消滅した時期です。この時期のどの辺りまで、郡家の正倉院としての機能や意識が残っていたのかは不明ですが、これまでの発掘調査からは、正倉院内でこの時期の掘立柱建物や溝状遺構は確認されていません。ただし、正倉院地区の西側、古代寺院跡である影向寺遺跡に近い橘樹郡家跡^{かみはらしゆく}上原宿地区では、この時期の館の施設と推定される大型掘立柱建物が確認されており、橘樹郡家はまだ維持されていた可能性が高いと考えられることから、橘樹郡家の正倉院のみがこの時期で消滅したのか、または別の場所に移ったため建物が見られないのかは、今後の課題といえます。

細は不明です。

③影向寺遺跡における古代寺院伽藍配置

前述したように、橘樹官衙遺跡群は、古代寺院、郡家の館、厨家、郡庁、正倉院が東西横並びに配置されていたことが明らかになってきました。最も西側に配置されたのが、影向寺遺跡で確認されている古代寺院です。現在も同じ場所で古代からの法灯を伝える影向寺が所在しています。影向寺の南東側には南から北へと谷が入り込んでいますが、古代においては、その谷を通してこの地域の古代における主要道路の 1 つであった中原街道から古代寺院の金堂や塔^{いらか}の麓がよく見えたと推定されます。

古代寺院の主要施設としては、現在の影向寺本堂である薬師堂の基壇下から古代の金堂跡が確認されており、薬師堂南東側に所在する^{ようごういし}影向石北東側には塔跡が確認されています。また、平成 25 年度から実施している橘樹官衙遺跡群確認調査事業において薬師堂南西側で確認した、南北 6 間、東西 3 間の掘立柱建物跡も主要施設の 1 つであると考えていますが、この建物がどのような役割をもった施設であったかは不明です。この 3 棟の主要施設は、瓦の出土状況等から金堂は総瓦葺きと推定されますが、残りの 2 棟は屋根が何で覆われていたか不明です。建物以外の主要施設としては、金堂跡の西側 60 m 付近で確認された幅 2～3 m の直線状に伸びる溝があり、古代寺院の寺域を画した区画溝であると推定されます。

この 3 棟の主要伽藍以外にも、薬師堂北西側で一面廂や総柱の掘立柱建物跡や堅穴建物等が発見されていますが、古代寺院の伽藍配置^{がらん}や施設の内容等は、まだ十分に明

らかになっていない状況といえます。



図5 橘樹評段階施設及び古代寺院関連施設推定配置図 (S=1/1500)

Ⅲ. 史跡橘樹官衙遺跡群における史跡整備

このように、近年の調査等で得られた新たな知見を基に、川崎市教育委員会は、橘樹官衙遺跡群の価値や魅力などを多くの方々に知ってもらい、郷土への愛着をもってもらうため、令和4年度から歴史公園の整備工事を開始しました。工事は今年2月末で完了し、いよいよ5月18日に『橘樹歴史公園』としてオープンする予定です。

今回の整備の目玉は、全国初の飛鳥時代の倉庫を復元したことになります。この倉庫を復元にあたっては、最も参考になる同時代（飛鳥時代）の現存する倉庫建築が現在の日本にないため、年代の近い奈良時代・平安時代の倉庫建築や飛鳥時代で現存する建築物の事例を参考にしつつ、発掘調査で得られた情報や橘樹官衙遺跡群が位置する川崎市の気候・自然環境といった観点からの視点等を加えて検討・設計しました。その結果、復元倉庫の構造は板校倉造とし、建物を支える束柱はクリ材、屋根は茅葺きとしました。さらに、現代の建築基準に適合するよう、古代と現代の建築技術を融合させる等、試行錯誤しながら復元設計を完成させ、令和5年9月から復元工事を始めました。

今回の史跡整備は、遺跡群の歴史的価値などを多くの方々に広く知ってもらうため



写真 1 橘樹歴史公園全景（南から）



写真 2 飛鳥時代の復元倉庫と史跡標柱（南東から）

の整備だけでなく、もともとあった実がなる柿や梅の木を残すとともに、四季折々の花々が咲く植栽や遺跡群のシンボルツリーとして橘樹郡の名前の由来ともいわれる「橘」の木（ヤマトタチバナ）を置くなど、花や植物に興味がある方々にも来てもらえうような工夫をしました。

坂道を上り、目の前の飛鳥時代の倉庫を^{あお}仰ぎ見ると、古代の人々が抱いたであろう、橘評家や橘樹郡家への^{いけい}畏敬または^{いふ}畏怖の念を感じることができると思います。また合わせて、今から約1,300年以上前に、この地にこのような建物を建設した古代の人々のすごさも体感してもらえたらと思います。

【参考文献】

河合英夫・伊東甚吉 2007「影向寺遺跡第11次調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第43集、川崎市教育委員会

河合英夫ほか 2000『川崎市千年伊勢山台北遺跡発掘調査報告書』、千年伊勢山台北遺跡調査団

河合英夫ほか 2007『川崎市宮前区 影向寺遺跡第12次調査報告書』、玉川文化財研究所

栗田一生 2018『神奈川県川崎市 橘樹官衙遺跡群の調査－橘樹郡家（郡衙）跡〔千年伊勢山台遺跡〕第14次～第25次・影向寺遺跡第16次～第19次調査報告書－』、川崎市教育委員会

栗田一生 2022『神奈川県川崎市 橘樹官衙遺跡群の調査Ⅲ－千年伊勢山台遺跡〔橘樹郡家跡〕第26～29・31～34次調査報告－』、川崎市教育委員会

服部隆博・河合英夫ほか 2005『武蔵国橘樹郡衙推定地 千年伊勢山台遺跡－第1～8次発掘調査報告書－』、川崎市教育委員会

服部隆博・栗田一生 2014『神奈川県川崎市 橘樹官衙遺跡群の調査－橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書〔古代編〕－』、川崎市教育委員会